

書籍タイトル

『ウェブ調査の科学—調査計画から分析まで—』

著者（訳者）

Roger Tourangeau, Frederick G. Conrad, Mick P. Couper 著・大隅昇・鳩真紀子・井田潤治・小野裕亮 訳

出版社

朝倉書店

刊行年

2019年

総ページ数

348頁

本書は、ウェブ調査によるデータ収集に関連する文献について総合的に概観し論評することを通してウェブ調査の長所と限界について考察した“The Science of Web surveys”の翻訳書である。本書に対する評者による評価を端的に表現すると「分野や目的を問わず、ウェブ調査によってデータを取得することを考えている、あるいは既実践している人々にとって、必読の書」となる。以下、評者がなぜそう考えるかについて述べる。

評者は心理学者である。数理社会学会の会員ではなく、非会員でも発表できるらしい大会に参加したこともなく、おまけに数理にも社会学にも明るくない。後述の事情があるので本書の書評をとご依頼をいただく理由は分からなくもないが、まさかそれが『理論と方法』からだとは思わなかった、というのが正直なところである。しかし、ちょっぴり「外した」感のある仕事への嗜好性は人一倍高いので、「何か勘違いをなさっているのではないですか」などとは（思ったけど）言わずにお引き受けした。場違い感甚だしい内容の書評になるかもしれないが、こういう人間がこういう経緯で書いているのだということでご寛恕いただきたい。

なぜ「場違い感」を醸し出すことを想定しているかといえば、ウェブ調査を何のために実施しているかが、原著者の著者らおよび本書の訳者らと評者のような心理学者とでは、大きく異なることが多いからである。前者は社会調査と称されることが多く、後者は、あまりそういう言い方をすることはないが、敢えて対比的に表現すれば、心理調査である。私の理解する限りにおいて、社会調査の主たる目的は、社会について知ることである。対象は個人である一方で、「その個人がある集団の中でどのような位置づけにあるのか」が重要なので、対象集団から無作為（あるいはそれに準じた適切な方法で）抽出することの必要性が強調される。そのため、本書も「はじめに」に続く第2章で真っ先に抽出法に関する議論がなされている。一方、心理調査の主たる目的は、個人の嗜好・態度などを知ることである。得られたデータが社会の似姿にふさわしいものであるかどうかよりも、個人のふるまいと内面あるいは状況との関連を解き明かすことが重要なので、無作為抽出の必要性はあまり強調されない。その反面、調査回答を通じてそれらなるべく正確に取り出せるよう、尺度構成や質問形式、文章や画像等による刺激作成に対するこだわりが強い。本書で言えば、心理学者の注意がより向くのは、測定と設計に関する議論が始まる4章以降ではないだろうか。「へえ、抽出法の話が最初に来るんだ」というのが素朴な感想だった。評者は社会調査を含む研究をした経験もあるので、どちらが良くてどちらが悪いという話ではないという立場だが、「心理学者はサンプリングを無視する」「大学

の教室でとったデータで書いた論文が一流誌に掲載される」というのが社会学者から心理学への典型的な「攻撃材料」であるらしいことはよく知っている。心理学者が本書を精読することは、単にウェブ調査という研究法を微に入り細にわたって知るだけではなく、自分たちがなぜそういう批判を浴びるのか、社会学者が何にこだわって調査に取り組んでいるかを改めて実感するという副産物効果をもたらすことであろう。

評者とウェブ調査の関わりについても述べておこう。評者がウェブ調査で初めてデータをとったのは1996年1月である。WorldWideWeb(WWW)技術が開発されたのが1990年、1994年に初の商用ブラウザNetscapeが誕生し、日本のいわゆる「インターネット元年」は1995年だと言われているから、草創期からの利用者だと言ってよいだろう。しかし、ウェブ調査の「問題点」を自覚しその洗い出しに着手したのは20年ほど経った2014年のことだった。ウェブ調査という媒体で得られるデータは、(社会学者からは悪評紛々の)大学の教室で実施する紙筆式の調査とは「何かが違う」と考え、Satisfice(努力の最小限化)に注目した。Satisficeとは、協力者が回答に際して応分の注意を払わず、目的を達成するために必要最小限を満たす手順を決定し、追求する行動のことである。原著の筆頭著者であるRoger Tourangeauの名を知ったのは、当該研究に関する論文を書こうと資料を集めている時だった。評者と共同研究者の小林哲郎氏(香港城市大学)による一連の研究で得られた知見と教訓は、確信犯的にSatisficeに走る人はそれほど多くないこと、Satisficeをしてしまった人にその自覚を促せばその後の行動をかなり「矯正」できること、そして、調査者はSatisficeをなるべくさせない調査環境を作ることに最大限の努力を傾けるべきこと、の3点に集約できる。最後の点は、どんなデータをどのような目的で収集するためにウェブ調査を行うのであろうが、調査者が常に肝に銘じておくべきことで、本書で非常に手厚くなされているウェブ調査における測定誤差に関する議論が大いに参考になるはずだ。

最後に、原著にはない、本書の特筆すべき点を挙げておきたい。それは、本書は、翻訳書を越えた書籍であるということである。原著をお持ちの方は本書との分厚さの違い(原著の総ページ数は198頁)に驚かれたことと思うが、これは原著の全訳のほかに、付録として「用語集」「国内文献」「海外文献」「関連する学会および機関の一覧」、補章として長年日本の社会調査の最前線に立ってこられた井田潤治氏による「日本におけるインターネットによる世論調査、統計調査の現況」が加えられていることによるもので、これらのコンテンツが総ページ数のおよそ1/3を占めている。文献リストは出版社サイト(<http://www.asakura.co.jp/books/isbn/978-4-254-12228-2/>)でWeb版(随時更新かつ文献へのリンクつき)も提供されており、これらの資料も読者にとって「宝の山」である。これらが提供されていることにより、「ウェブ調査によるデータ収集に関連する文献について総合的に概観し論評する」という原著者の精神を翻訳者らもまた熱く共有していることを実感できる。

あらためて、本書を日本語に翻訳し、そればかりか、日本の研究者にとって現時点ではこれ以上ないというレベルの充実した「付録」と「補章」をものして下さった大隅先生はじめ訳者(著者)各位に、心からの敬意を表したい。ありがとうございました。

執筆者氏名(ふりがな) 三浦麻子(みうらあさこ)

所属 大阪大学大学院人間科学研究科

職位 教授

『理論と方法』67号書評

所属先住所 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-2

メールアドレス asarin@hus.osaka-u.ac.jp

研究関心 社会心理学，コミュニケーション，心理学研究法